



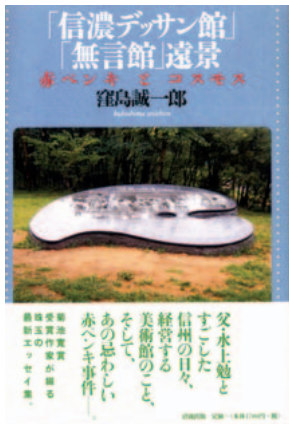
平成22年5月17日
卓話 『信州の小さな美術館のこと』
「信濃デッサン館」「無言館」館主・作家
窪島 誠一郎 様

昭和54年、私は上田市の郊外に信濃デッサン館という美術館をつくりました。飾られている画は天折した絵描きたち。代表を一人だけご紹介します。村山槐多は明治29年生れ。信州を愛し上田を愛した絵描きで、沢山の浅間山の画と千曲川の画を残しました。彼を肺結核が襲ったのは19歳の夏。

「神よ いましばらく私を生かしておいてください
…生きて居れば空が見られ 木がみられ 画が描ける あすもあの写生がつづけられる」。
槐多はこの有名な「祈り」という詩を残して22年の生涯を閉じました。翌々年、北原白秋によって「槐多の歌える」という詩画集が出版されます。

東京、国立近代美術館に槐多の名作「バラと少女」が飾られています。燃え狂うように真っ赤な薔薇の花の前で、おさげ髪の少女がじっとこちらを見ている画です。私が初めて槐多を知ったのは高校を卒業して数年後。「槐多の歌える」との出会いが自分の人生を決めたと思えてなりません。私は34歳の時に信州上田を訪ね、槐多の画を探して信州を放浪し、信濃デッサン館を作ったわけです。

それから13年前、少し離れたところに戦没画学生慰霊美術館、無言館を建設しました。きっかけは画家の野見山曉治さんの、戦後50年、戦地で亡くなった才能ある画学生たちの画がどこに行ってしまうか気が気じゃないという一言でした。それが私の血を沸かし、野見山先生と3年半、全国87のご遺族を訪ねて画を集めました。



そのうちの一人、種子島の画学生、日高安典。昭和19年、ルソン島で亡くなりました。最後まで描いていたのはモデルを務めてくれた恋人の画。後ろ髪を引かれる思いで日高が旅立った日のことを弟さんにご記憶されています。



外では天皇陛下万歳の声がこだまし、村中が兵隊さんを送り出す会が開かれていた。しかし彼は部屋から出てこない。「あと5分、あと10分、この画を描かせておいて欲しい」と言ってキャンバスに色をつけていた兄。無言館の一番手前の壁に豊かな髪を後ろに束ねて陶磁器を伏せたような乳房をちょっと上に反らして、すっきりと立つ日高の恋人像が飾られています。

無言館は反戦平和の美術館と謳われますが、画学生たちは反戦のために描いたのではありません。大好きな人を描いたんです。ある若者は妻を、ある若者は父や母を描いた。俺は確かにここに生きている、そして自分の命はごく身近な愛する人たちに支えられている。彼らの画は人が人を愛することの素晴らしさを伝えている。その、人と人との濃密な絆の証を見ていると、戦後60数年、私たちが何を怠り、いかにかけがえのないものを失ってきたかを問うているような気がします。

人は自分が受けた感動を他者の命に伝えていく義務がある。命はそのことのためにあるとっていい。人は生まれながらにして心の中に1冊のスケッチ帳を持っている。そういう意味では戦没画学生も今生きる私たちも、同じような気がします。ありがとうございました。